

## ” 1 ” について

- одинの機能および不定名詞句について -

三谷 恵子

Si j'entends aboyer *des chiens*, je puis ignorer leur nombre, mais il ne me viendrait pas à l'idée d'imaginer qu'ils peuvent être indifféremment quatre, cinq ou six. La notion grammaticale d'*indéfini* est donc équivoque; quand on parle de *quelques chiens*, le nombre des chiens est inconnu ou n'est pas exprimé, mais il n'est pas indéterminé.

Bally, C., Linguistique générale et linguistique française, p77<sup>1</sup>

0.0 本稿で論じるのはロシア語の”один”の機能、特に不定名詞句を構成する不定形容詞としての機能である。本稿の構成は以下の通り：

I. 名詞句の言及対象について；「同定」について。

指示行為、名詞句の「指示対象」や「同定」について、用語の定義を含めて名詞句と指示対象の関係をめぐるおおまかな見取図を示す。

II. 「不定名詞句」の定義；「不定性」について；不定形容詞の特性。

本論で問題とする「不定名詞句」の定義をあたえる。さらに、不定形容詞の機能と直接には関係しないが、「不定性」неопределенностьということについての若干の考察を与える。

III. 不定形容詞としてのодинに関する考察。

01. [один]の語義；02. 不定形容詞と数量詞の関係。

03. одинの使用される、あるいはされない環境。

IV. одинの照応機能。

I. 名詞句の言及対象および「同定すること to identify」について。

I.01. 「指示」「表示」および「言及」

指示表現は言表と外界を結ぶ行為として長く言語学、哲学の研究対象となってきた。指示(普通reference、場合によってはdenotation、designation)や指示対象referentという用語は、しばしば所与の表現に対応する言語外世界(特に現実)に実在する対象に關説して用いられる。その場合、総称的な表現や不特定の対象についての言及(A student must learn.の a student)のように具体的な対応物のない表現は指示対象を持たない、非指示的non-referentialな表現とされる。

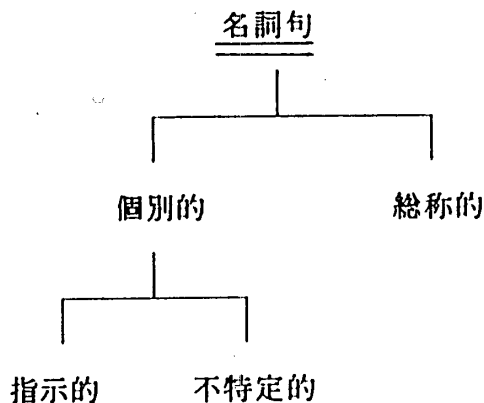
このように「指示」を定めると問題になるのは、ラッセルの指摘した確定記述 definite description に代表されるケースである。「フランスの現国王は

禿だ」という時、表示句「フランスの現国王 The present king of France」は指示対象を持たない（フレーゲでは意味Bedeutungを持たない、意義Sinnのみからなる表現）ことになる<sup>2</sup>。

この問題を哲学的課題としてでなく、言語学の、ことに個別言語の諸現象といかに関わるかというレベルで検討することはきわめて興味深い課題であるが、詳細な議論はすぐ後に述べる同定の問題と共に、本論の議論の領域を越えるので、別に考察を改めることとして、本論では、もっぱら用語上の区別をつけるため、特定の個体（それが実在するかどうかは別）に言及する名詞句表現を「指示」、その対象を「指示対象」とし、一般的な意味での指示、つまり名詞句がなにかを表すことを「表示」あるいは「言及」と表す。「対象」という語は後述する特定の、不特定のあるいは総称的表示に関わらずそれが言及される領域に属するものについて用いる。

総称的genericな意味でない場合、可算（無限）集合をあらわす名詞句は何らかの個体に言及する（個別的言及）。個別的言及は特定の個体への言及（指示）か、不特定（任意）の個体への言及である。これと平行に、非可算集合、あるいは概念や事象を表す名詞（句）も発話の状況、現実に対応して個別的・非個別的(一般的)な言及のタイプを設定することができる (I-1)。

[I-1] [名詞句の言及のタイプ]



指示的という時、話者及び聞き手が実際に指示対象を同定(identify)しているかどうかという知識のレベルによって、指示対象は同定済み(identified)か、未定(unidentified)かに分けられる。以下「未定」はもっぱら unidentified の意味で用いるものとする。

「同定」「未定」という区別を設けることの意味は、有名なドネランのミス殺しの気違いの例で説明されよう。

The murderer of Smith is insane.

と言う時、話者がある特定の人物を思い抱いて（それが真犯人であるかどうかは別問題）いるとき、話者においてこの表現形式の指示対象は「同定されている」といえる（その人物は実際には話者の個人的には全く知らない、テレビのニュー

スで顔写真を見ただけの人物かもしれないのだが)。これはドネランが指摘した「指示的referential」な用法に対応する。一方、ドネランが属性的attributiveと呼んだ用法、つまり、誰かは知らないがスミスを殺した犯人は気遣いだ、という場合がある。ここで指示されるのは、スミス氏殺害というただ一つの属性を持った、いわば「顔のない」対象である。このような状態は先の「同定された場合」とは区別されなければならない<sup>3</sup>。

よく似た別の例はパルティエによって次のように示された：

John wanted to murder the man who lives in the Apt.3

このケースでは、3号室に住む特定の男を殺したがっている（Johnはそれが誰だか知っている）場合と、誰かは知らないが3号室に住む人物を殺したがっている（Parteeが想定した状況は、Johnは3号室の真下に住んでいてこの人物の立てる騒音にうんざりしている、というものである。だからそれは本当はwomanかもしれない。あるいはそもそもジョンが毎日聞かされている物音は実は3号室のとなりの住人の仕業で、3号室は空室かも知れない）<sup>4</sup>。

こういったことを念頭に、言表行為において対象・事象が「同定」されることに、以下のように非形式的な定義を与える：言表においては表現Xの対象は、それが言及される時点において対象に割り当てられる一つ以上の属性、特徴の集合として捉えられる、と考える。その特徴、属性は話題となる行為や状況に関する一時的なものでも、その対象に恒常的なものでもよい。そこで、指示対象が同定されるとは、そのような属性、特徴の集合（「群cluster」といってもよい）として、同カテゴリーの他の個体から区別されることである<sup>5</sup>。

言表における同定、未定の問題は話者、聞き手の、発話に関連する世界にいかに関与されるか、という観点から考察されなければならない。この問題を情報の新旧という談話の分析と関係させれば、次のように発展できるだろう：いま「未知」の情報を、「聞き手が前提、先行する文脈において与えられた情報（データ）を参照して、その表示に対応する何らかの対象、事象を見いだすことができない、と話者が判断するもの」と考えるならば、このような判断に基づいて話者が何かの要素を新たに発話に導入するとき、それは指示的であれ、非指示的であれ、聞き手にとっては未知である（もちろん話者の予想に反して聞き手の中にすでに存在するものへの言及である場合は厳密には未知ではないが）。一旦導入された要素（「言及済みの情報」）は「未知」ではない。しかし、話者において同定済みの要素が未だに聞き手にとっては未定である状態がある（先の「スミス殺しの例で言えば、その人物が何者であるかをまだ明らかにしていない段階）。その対象について話者がさらに情報を与えれば、ある段階で聞き手にとっても同定されたものとなる。これはいわば聞き手の「了解」に関わるレベルである。この関係は次ページ1-2のように表すことができる。

## II. 定名詞句/不定名詞句；不定性について；不定形容詞の特性。

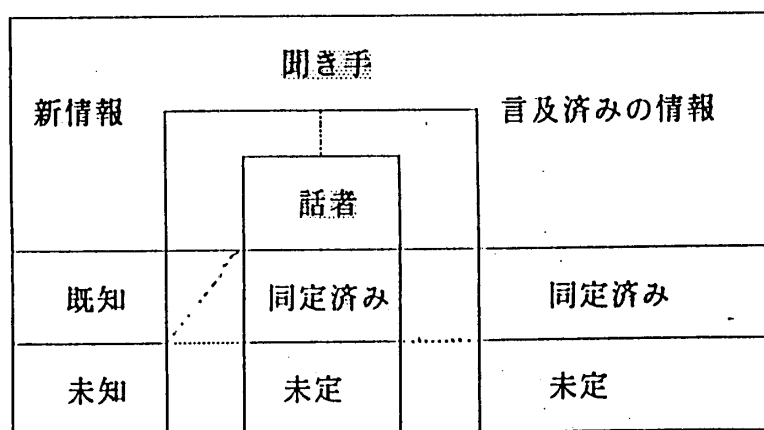
11.01 「定名詞句」とは、聞き手において直ちにその表示内容が確定されるような名詞句、具体的には、言及済みの事柄、もしくは新情報であっても、聞き手にとって即座に同定可能な事柄に対応する名詞句である。不定名詞句とはそのような確定を聞き手が行えない（と話者が判断する）場合の表現、具体的には聞き手にとって未知の新情報とする。

「表示内容が確定される」ことの意味は、指示対象が同定されることと同義ではない。前者は、与えられた名詞句が既に言及された、あるいは聞き手が知っている何等かの事柄についての再言及であるか否か、の表現形式レベルでの区別とする。したがって、語られる内容自体が不特定の対象への言及、あるいは話者自身にとって未定の事柄であっても、それ自体が既に言及済みのものであれば定名詞句の形式となる。

不定名詞句は、名詞句として与えられる新情報と解釈してよい。このように定・不定名詞句を定めると、冠詞のある言語においては定冠詞、不定冠詞がそれらの表示形式としての役割を果たすことが想起される。しかしながら、ここで論ずる定・不定名詞句の区別は、形式のあり方を規定するものではない。たとえば固有名詞（を含む名詞句）が聞き手にとって全く初めて耳にする情報であるとき、それはまず、不定名詞句（この場合もちろん「未定」）として位置づけられる。一方、固有名詞がよく知られたものであれば、これは直ちに定名詞句の資格を得る。そこで、固有名詞は場合により、不定名詞句とも定名詞句ともなる。

多くの、非冠詞型のスラブ語においては定名詞句・不定名詞句は特定の形式によって特徴づけることはできない。それらはいくつかの語彙的方法（定名詞句は同語反復、指示詞や代名詞などの照応表現）、文頭の位置；不定名詞句は文末の位置やゼロ限定辞、不定形容詞によって実現される。

#### [1-2] 指示と対象の同定



11.02 冠詞型の言語において名詞句NPは定冠詞・不定冠詞・ゼロ冠詞のいずれかを伴って表現される。無冠詞型の言語ではこのすべての場合にゼロ限定辞が対応

する：

<不定冠詞による不定名詞句⇔ゼロ限定辞>

200) Fr. Et soudain, une ombre d'homme se dressa sur cette lisière éclairée du bois. La tête dépassait les arbres, se perdait dans le ciel.

Rs. И внезапно на этой освещенной опушке леса поднялась тень человека. Голова его была выше деревьев и терялась в небе.

そしてふいにこの日の当たる森の外れに人影が現われた。その頭は木々を超え空に消えていた。

<定冠詞定名詞句⇔ゼロ冠詞> <ゼロ冠詞；不定名詞句⇔ゼロ冠詞>

201) Dt. Schließ das Fenster, sonst kommen [0] Mücken herein.

S-C. Zatvori prozor, inače će ući komarci.

窓を閉めなさい、さもないと蚊が入ってくるよ。

スラブ語の名詞句に関しゼロ限定辞の使用を禁止する純粋に文法的条件はないと考えられる。逆に、定（総称的表現も含めるとして）・不定名詞句のすべての場合に対応するという点で、ゼロ限定辞はオールマイティで、定：不定に関し多義的である。

曖昧性を避けるためには必要に応じて明示的な限定辞の使用が要求される。定名詞句では指示形容詞、所有形容詞などの照応に関わる指示詞が、不定名詞句ではこのときしばしば不定形容詞（以下で詳述）が用いられる：

202) Fr. Il s'aperçut que sur l'auvent une pancarte était colée.

Rs. Он увидел, что под навесом был приклеплен какой-то билетик.

彼は庇の下に小さな札が張り付けられているのに気づいた

203) Fr. Maintenant l'étudiant est devenu un vieil et célèbre écrivain.

Rs. Теперь тот студент - старый знаменитый писатель.

今やその学生は年老いた著名な作家なのであった。

この関係は概略、次のように示されるであろう（但しこの関係は定冠詞、不定冠詞とロシア語の諸限定辞の機能が一致することを意味するのではなく、それぞれの機能の重複部分を示すのみである）(2-1)：

[2-1]

名詞句	冠詞型言語	無冠詞型言語
定名詞句	定冠詞	ゼロ限定辞 <ul style="list-style-type: none"> <li>指示詞、代名詞</li> <li>不定形容詞</li> </ul>
不定名詞句	不定冠詞	

II.03 本節では、不定形容詞の機能とは直接関連しないが、文法カテゴリーとして定められている「不定性неопределенность」の特性について吟味したい。

本論の冒頭で引用したバイイの指摘にある「不定」の多義性はどのようにとらえられるか。

まず辞書AK4<sup>2</sup>で определенный, неопределенный、それにこれと関係の深い известный, неизвестныйの語義を見ると、次のように定められている<sup>11</sup>：

[1]определенный. 1. определитьの被形過。2. твердо установленный, назначенный. 3. вполне сложившийся, отчетливый, ясный. 4. известный, тот или иной, некоторый. 5. несомненный, безусловный, бесспорный.

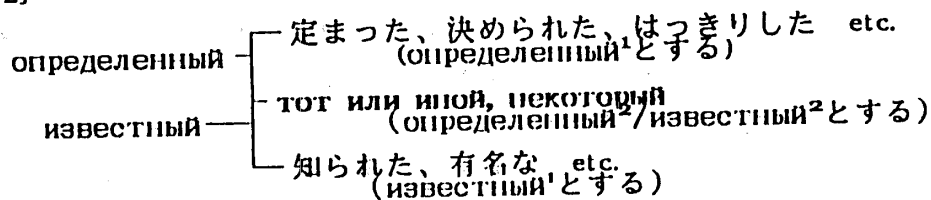
[2]неопределенный. 1.точно не установленный. 2.неотчетливый, неясный; уклончивый. 3. ничего не выражающий.

[3]известный. 1.такой, о котором или которого знают, знакомый. 2. такой, о котором все хорошо знают, пользующийся широкой популярностью; общепризнанный. 3. определенный, тот или иной, некоторый. 4. такой, который подразумевается, но почему-л. нежелательно или неудобно назвать.

[4]неизвестный. 1.такой, о котором или которого не знают. 2. не пользующийся признанием, успехом, известностью. 3. (名詞で) незнакомец, незнакомка.

いま注目すべきは、определенныйの語義4と известныйの3である。この両者の語義の関係はつぎのように示される：

[2-2]



両者の共通部分に不定形容詞неопределенное прилагательноеである некоторыйが現れる。そこで今度はAK4<sup>2</sup>の некоторыйの語義をみると：

1. какой-то, точно не определенный. 2. кое-какой, незначительный.
3. (pl) не все, отдельный.

とある。ここで、некоторыйの語義 1: какой-то, точно не определенный.をとり、上の図式[2-2]にあてはめると「определенныйは точно не определенный」であり、「некоторыйは определенный かつ точно не определенныйである」という愉快的(1)帰結に至る。

определенный<sup>2</sup>/известный<sup>2</sup>は文法カテゴリーの、言い替えるならばメタ用語としてのнеопределенностьに対応する意味である。この時、これらの形容詞は対象の特性をあらわす性質形容詞としてでなく、ある特定の対象・事象についての言及であることを示す、不定形容詞として機能する (ex. определенная группа; известные условия)。

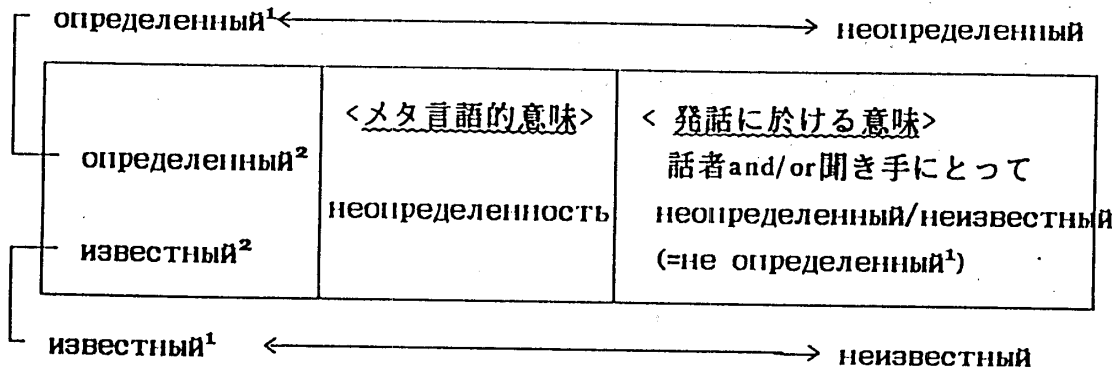
一方неопределенныйの語義から解るように、неопределенныйという語自体は

不定形容詞としての意味を持たない（\*неопределенный человек）。この語はひとたび名詞句の中に位置すると性質形容詞としてしか機能しない。

またнеопределенныйはопределенный<sup>1</sup>の、неизвестныйはизвестный<sup>1</sup>の否定の語義を持つが、определенный<sup>2</sup>/известный<sup>2</sup>(=некоторый)の語義に対する否定に該当する語義は欠如する。

この一連の関係は改めて次のように表されるであろう：

[2-3]



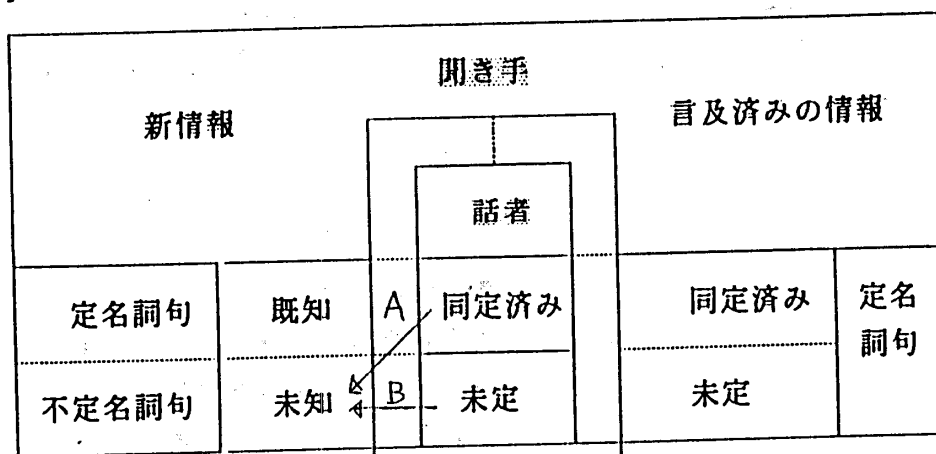
「不定のнеопределенный」という語の多義性はいまや明かである。その一つは「不定性（不明確、不確定）」をあらわす性質形容詞の意味であり、いまひとつはメタ用語としての意味である。不定形容詞に現れる（文法的意味の）неопределенностьはさらに多義的である。それは対象が指示的である場合と、不特定のである場合に対応し、前者では「ある（特定の）」という限定によって、言及対象を限定する意図を伝えながら、限定する要素が何であることを伝えないという意味で不定であり、後者では表示対象そのものが本来特定されないことを示す<sup>12</sup>。

II.04 本稿で「不定形容詞」と呼ぶのは「不定代名詞的形容詞（неопределенные местоименные прилагательные）」でロシア語ではнекий, некоторый, какой-то, какой-нибудь(-либо), кое-какойなどである。один, тот или инойも不定形容詞の機能をもつ。これらは不定代名詞（кто/что-то, кто/что-нибудь, некто, нечто）、不定数量詞（немного, несколько）などとともに不定代名詞の文法カテゴリーに類別される。

現象的には、不定名詞句が現れる状況と不定形容詞が用いられる状況はしばしば重なるが、この事象は「不定形容詞が現れるのは必ず不定名詞句においてである」と、「不定名詞句の標識としてしばしば不定形容詞が用いられる」という2つの規定によって特徴付けられるべきである。ところで不定名詞句なり、不定形容詞なりについて考えるとき、そこには作用域の異なる3つの「不定」が含まれている。第一は言及対象自体の不特定性、つまり、話者の意図が不特定の対象についての言及である場合。この場合については以下の項ではふれない。第二は不定名詞句の定義としたように、聞き手において確定されていない、と言う意

味での「不定」の表示であり、第三は話者の言及対象・内容についての知識の表明、という意味での「不定」、つまり、言及対象を話者がどのようなものとして理解しているかに関わる部分である<sup>13</sup>。この最後の「不定」は話者の立場からは(1)必然的不定性と(2)選択的不定性として考えることができよう。前者の場合、話者は対象を同定する(そのための属性を示す)ことが(知らないために)できない(определенный, но не известный)ことを表し、後者では話者は発話の要請上聞き手に具体的に示すことが不必要、あるいは具体的に示さないことが必要であることを示唆する。以上のことから名詞句の言及内容と定・不定名詞句の現れる領域をまとめると次のようになる:

[2-4]



- A: 「不定」1 (選択的不定性)  
 話者「同定済み」聞き手「未知」
- B: 「不定」2 (必然的不定性)  
 話者「未定」聞き手「未知」

既に指摘したように不定形容詞(また、不定代名詞も)が構成する不定名詞句は指示的な意図をもつ場合と、不特定の意図を持つ場合がある。ロシア語においてはこの区別は語彙的に差異化される(i.e. -то, кое-タイプは指示的に、-нибудьタイプは不特定の対象についての言及である)ことが指摘されている。この問題は本論では取り扱わないが、ひとつの興味深いテーマである。

III. 以下ではодинがどのような機能を持つかを考察していく。

III.01. 数詞の1はカテゴリーの基本単位を示す<sup>14</sup>。そこで具体的な意味の名詞と結びついたときには対象物が「一つ」であることを表すし、抽象的な意味の名詞では何等かの形で切り取られる一つの事象、現象を表す。初歩の集合論的にみれば「一つのX」と言うとき、それは集合の要素たる特定のある一つまたは不特定のある一つであり、「ある一つ」とは複数の要素を持つ何かの集合の中の「ただ一つ( $\exists! x$ )」または(そのような集合の)「少なくとも一つ( $\exists x$ )」であ



る。実際には言表行為において対象が「ある一つ」として示されるとき、「少くとも一つ」ということを問題にする必要はない<sup>15</sup>。

「一つであること」(あえて勝手に"one-ness"/"один-ость"という語を用いるとして)は、発話の状況の中に組み込まれた時に、どの様な意味を獲得するか。このことを知るために、まずAK4<sup>2</sup>とОжегでодинの語義を確認する：

[AK4<sup>2</sup>] 1. число 1; количество (*один метр*). 2. без других, в отдельности от других, в одиночестве (*Выхожу один я на дорогу; Сквозь туман кремнистый путь блестит*). 3. никто другой или ничто другое, единственный (*выйти на улицу в одном платье*); только. 4. тот, же самый, тождественный; одинаковый (*сотять на одном месте; вы одного мнения со мною*). 5. целостный, неделимый, единый (*Голпа*) *только шевелилась, гудела, вздыхала и оказалась одним существом*). 6. выделение единичного лица, предмета, явления итд. или группы лиц, однородных предметов из какой-то категории, среды, ряда. 7. в сочетании с другой употребляется при противопоставлении (при перечислении, в сочетании с "другой"). 8. противопоставление каких-либо качеств, действий (в значении этаких свойств, качеств и т.п. которые, меняясь делают данное лицо, явление иным, отличным от прежнего (*шум его [дождя] был двойной, разный, - в саду один, возле дома - другой*)). 9. какой-то, некий (*Несколько таких черепах вез в нашем поезде один молодой человек*).

[Ожег] 1. число 1; количество. 2. без других, в отдельности (*Он живет один; одним нам не справиться*) 3. какой-то, некий (*в один прекрасный день; один из присутствующих*). 4. тот же самый, тождественный. 5. только, исключительно (*В вазе одни яблоки, грущ нет*). 6. какой-нибудь из (в ряду сходных). 7. целостный, единый.

以上の記述にあらわれる 1 の語義を[3-1]にまとめる：

[3-1]

1

語義	同義表現
00. 一つの(数詞の1)	1
01. ただ...のみ	только, лишь
02. ほかにない、唯一の	единственный
03. まとまった、分割できない	неделимый, целостный
04. 同一の	тот же самый, тождественный
05. とある	какой-то, некий, некоторый
06. (...の)一つ	
07. あるものは... (別のあるものは...)	

もちろん全ての語義に共通する意味は"один-ость"、すなわちодин によって限定されるNPの対象が発話世界において一つ存在することである。われわれの関心は不定形容詞としてのодин、つまり語義の05と(若干の条件付きで)06にあ

る。以下では不定形容詞の意味のодинを単にодинと書き、数量詞1（いち）の語義00をОДИН,その他の語義の場合を上記[3-1]での語義番号付きで記す。また、語彙素としての“один”を問題にする時は[один]とする。

まず指摘すべきは、один01が機能上他の語義と区別されることである。「ただ...のみ」という場合、[один]はNを修飾してNPを形成するのでなく、NP全体を述部との関係において規定し、文全体に関係付る：

310) Во всяком случае, что касается Пока, то лично я не верю, что сороклет им движет одна лишь бесстрастная коммерция.

[Шаука и Жиэнь. 138]

このことは01の同義語がтолько, лишь であることから推測できる。このような限定は、NPを構成する限定辞の機能とは区別されなければならない。この点はたとえば次のようなтолькоの用法を見れば明かであろう：

311) При подготовке к экзаменам мы можем пользоваться только конспектами.

あきらかにтолькоは直接конспектを限定するのでなく、можем пользоватьсяの対象がконспектのみであることを示す<sup>17</sup>。

один01は定名詞句においても用いられる：

312) Думаете, для вас одних наготовлено?! [Рыбаков, 22]

один02は“один-ость”に含意される唯一性の解釈が顕著になる場合で、同種の他の要素の存在を排除するという意味で指示対象は特定のである。03,04は指示対象の“один-ость”つまり単一性が意図される。前者は分割不可能な一つ、という意味で、基本単位の1の意味に近く、後者は複数の関係項に対し、言及対象が一つ対応するという特徴付けを得る。どちらも定名詞句においても用いられる。

[один]には複数形[одни]がある。この、自然数の秩序から言えば奇妙な現象は、もちろん多くの言語において実現されているが、ロシア語で[одни]が用いられるのは：(1)pluralia tantumの名詞や対のものに対しОДИНの意味で：одни шипцы, одни сутки. (2)толькоの意味で(одними вами доволен; об них одних думаю). (3)некоторыеと同義(одни мои знакомые недавно переехали в город)<sup>18</sup>。

(1)の、pluralia tantumと結合する[один]は対立項の単数を持たない。双数的複数で普通用いられるものは、片方の意味で単数ОДИНと結合する：

одни туфли у меня только целые :: куда это одна моя туфль?<sup>19</sup>

こういった名詞の複数量を表すにはいわゆる集合数詞(двое, трое, четверо..)が用いられる：двое ворот; пятеро саней. ただし5以上の不活動体名詞については基数詞の使用が優先する(нашел шесть/\*шестеро/ шипцов.<sup>20</sup>

そこでОДИНを基本とした数詞の体系はおおよそ[3-2]のような形をとる。

こうすると、ОДИНを集合数詞の系列に基本数として位置づけることができる。ただしこの扱いかたは次の疑問を提示するであろう：集合数詞は基数詞とは異なる

る語彙素である (lexemeとして区別しないと、語形変化のレベルでの区別と見なすことになる)。すると[*один*]に対し、集合数詞としての別の語彙素[*одни*]を認めることになるのか、と。これに対しては、[*одни*]は[*один*]の語形変化の範囲で捉え、集合数詞の1 (例えば“*одноe*”のような) の語彙的”空隙”を埋める機能を担うと考えておく。

[3-2]

---

*один два три четыре пять... несколько, много*

---

один мальчик, два мальчика  
 \*одни мальчики двое мальчиков  
 одна перчатка (две перчатки)  
 одни перчатки двое перчаток #

---

*одни двое трое четверо пятеро ... несколько, много*

---

# 現在では две пары перчаткиが普通。ペアのものの複数と数詞の結合については Мельчук を参照<sup>21</sup>。

・ ОДИН以外の語義についてみると、[*одни*]の(2)は[3-1]の01、(3)は05、06の、それぞれ”複数”である。さらに *один*07に対応する用法も見ることができる (Из указательных местоимений *одни* выражают субстанциальную идентификацию, *другие* - идентификацию качественных характеристик. Падучева 133)。一方、*один*02-*один*04に対応する複数の意味は[*одни*]には欠如している。これは、*один*02-*один*04のあらかず唯一性・単一性それ自体が、本来複数性との対立において見いだされる語義だからで、そのような意味における複数性を考えること自体、無意味なことといえる。

以上のことを[3-3]に示す：

[3-3] < 1 >

語義	定表現との共起	[ <i>одни</i> ]の有無	同義表現
00 基本数ОДИН	+	+	1
01 ただ...のみ	+	+	только, лишь
02 ほかにない、唯一の	+	-	единственный
03 まとまった、一つの	+	-	неделимый, целостный
04 同一の	+	-	тот же самый, тождественный
05 とある	-	+	какой-то, некоторый

06 (...の) 一つ	±	+
07 あるものは...	±	+

±06,07については後述

このように不定形容詞としてのодинとそれ以外の語義では使用環境や語形変化の範列の体系形態が異なることが見て取れる。ただしもちろん、以上の議論は、個々の語義が互いに全く独立しているわけではなく、[один]の表す "одиночество"のどの意味がより強く意識されるかの違いであることを了解した上での考察である。

III.02. 次に不定形容詞одинと数詞ОДИНに注目し、この両者の関係を「何の単数がодинなのか」という観点から見てみよう。

複数のものが言及されるとき、言及される対象、事象はそれ自体で全一的なものに見なされているか、あるいはそれらが属する何等かのより上位の集合(superset)<sup>22</sup>の部分として意識されているかである。この違いは中和される場合もあるが、ある場合には言語の表現に反映される

フランス語のcertain(e)s, quelques, plusieursは不定形容詞として複数名詞を限定する場合、いずれもよく似た意味になる。

<plusieurs//quelques>

320) Il aime répéter plusieurs fois la même chose.

彼は同じことを何度も繰り返すのが好きだ。

321) J'y suis déjà allé quelques fois.

私はそこにすでに幾度か行ったことがある。

322) Mon oncle possède plusieurs maisons en Seine-et-Marne.

私の伯父はセーネマルヌに家をいくつか持っている。

323) J'ai quelques amis à Florence.

私はフィレンツェに何人か友人がある。

<certain(s)//quelques>

324a) Certains élèves ne peuvent travailler dans cette salle à étude.

324b) Plusieurs élèves ne peuvent travailler dans cette salle à étude.

324a)bは「ある(何人かの)生徒はこの教室で勉強することができない」という意味ではほぼ等価である。ところが、plusieursのほうにはcertainsには生じない不特定(特定・未定ではなく!)複数の解釈がある。そのとき、plusieursの含意は「この教室で勉強できない不特定・少数の生徒がいる」というものになる。また、次のように:

325) Cette nourriture suffirait pour un chien,

この餌は猫一匹には充分だろうが

mais non pour deux chiens.      二匹には充分でない

mais non pour plusieurs chiens. 数匹には充分でない  
 mais non pour quelques chiens.

と並べてみれば明かに、plusieurs/quelquesは1,2,...Nという数量詞の系列に位置する。ところが

325b) Cette nourriture suffirait pour un chien,  
 mais non pour certains chiens.

では(ある)何匹かの猫には充分でない、の意味となる。このときcertainsが表す「不定」は不定形容詞の un certain(e) の複数である。この関係は昇順にすると次のようになるう：

数詞	UN,	DEUX,...	plusieurs//quelques
	— 1 —	2 ...	— N —
不定形容詞	un certain,	deux certains ...	certain(e)s

certain(e)sはしばしば何かの上位集合(全体集合)の表現をともなって用いられる(certains de nous 私たちの中の何人か)。このとき、部分の意味は顕著になる。明示的な表現がなくとも、部分の意味が文脈から推測されることがある。そのとき、不定数量詞のplusieursとの意味の違いが明らかになる；

326a) Certains pays voisins finissent par se fédérer.

あるいくつかの隣合う国々はついには連邦を形成する。

326b) Plusieurs pays voisins finissent par se fédérer.

隣合ういくつかの国々はついには連邦を形成する。

326c) Quelques pays voisins finissent par se fédérer.

隣合ういくつかの国々はついには連邦を形成する。

一方、上位集合に対する部分の意味が意識されず、不特定の複数要素を表すためにcertain(e)sが用いられると、単に不定数を表す数量詞plusieursとの差異が中和される<sup>23</sup>。

フランス語のcertainsとplusieursの分布はある程度、ロシア語の不定形容詞(некоторые, многиеなど)と, сколько-то, сколько-нибудь, несколько, много, немногоなどの不定数量詞の意味の分布と平行的である<sup>24</sup>。

今、несколькоとнекоторыеを比較してみよう。несколькоは不定数量詞で、(何かの部分でないという意味の)絶対的な数量を表す。これはОДИН, два, три ... という数量詞の系列に位置する。数量詞はそれ自体では何等かのより上位集合(superset)の部分であることを含意しない。この系列にはほかにсколько-то, сколько-нибудь, несколько, много, немногоなどの不定数量詞を位置づけることができる。несколькоは対象がそれほど多くない複数(だいたい5以上の不特定数)であることを示す<sup>25</sup>。但し、このことはнесколькоが上位集合の部分の意味を表す状況で用いられることを禁止するものではない：

327) Народу в поликлинике было немного: несколько человек сидело в приемной и кое-кто прогуливался по коридору.

一方 некоторые は「相対的」な不定数つまり、ある集合の不特定、あるいは未定の要素の複数をあらわす：

328) В Испании много испанцев, вернувшихся из Советского Союза. Они быди вывезены в нашу страну маленькими детьми в середине тридцатых годов, во время гражданской войны. Сейчас, вернувшись на родину, "наши" испанцы тянутся друг к другу между собой говорят по-русски, нередко образуют что-то вроде советского землячества. А некоторые вообще через какое-то время вернулись в СССР. [Наука и жизнь, 138]

несколько/некоторыеの表す不定量の意味の違いは次の文脈で明らかになる：

329a) В саду росло несколько яблонь.

329b) В саду росло некоторые яблонь.<sup>26</sup>

同様の関係は много と многие にも見て取れる（但し形態上の対立が生じるのは主格の場合のみ）：

330) Многие почтовые отделения в Лондоне содержат по несколько кошек и на них регулярно выписывается "зарплата". [Наука и жизнь 122]

（多くの郵便局＝全体の中の多数、の意）

supersetの存在が意識されなければ несколько と некоторые の差異は中和され、単に不定数の複数を表すほぼ等しい意味になる。このように、несколько と некоторые それぞれの系列の基本数としてに絶対数の1（ОДИН）と、不定形容詞の один を位置づけることができる。上位集合は特に意識されない場合もあるが、これが意識されると III-1 の語義<sup>06</sup>（один из）に近づく。複数 одни は不定形容詞の系列に属し некоторые の同義語となる。この2つの系列を降順に並べると次のようになる：

некоторые//одни..(немногие)... некоторый//один (不定形容詞の系列)  
N ————— > 1  
несколько (немного)...три, два, ОДИН (数量詞の系列)

III.03 不定名詞句を形成する один のいくつかの特性について。

不定形容詞としての один は不定名詞句を形成する。один の意図する「不定性」は何よりもまず聞き手にとっての「不定」すなわち未知の要素である<sup>27</sup>。ここから、один は話者が発話の世界に新たに導入しようとする要素の表示に用いられる：

331) Выйду, только не за тебя. - За кого же? Интересно. - Интересно ..  
Царень один, наш деревенский. ... Ты давно его знаешь? - Сказала ведь,  
с одной деревни. [Рыбаков. 23]

332) В начале июля, в чрезвычайно жаркое время под вечер один молодой человек вышел из своей каморки, которую занимал от жильцов в С-м переулке, на улицу и медленно, как бы в нерешимости, отправился к К-ну мосту.  
[Достоевский. 31]

不定名詞句で導入される要素は、すぐ続けて同定されることがある：

333) Вам покажу одну книгу - 13 дней, написал ее Роберт Кеннеди.  
[МН46 18.11.1990]

これから語ろうとする新たな要素の導入、という機能に関連して次のような文の「奇妙さ」も説明されよう：

334) Один кит столкнулся с одним кораблем.

どちらの[*один*]も*один*と解釈すると、一文に2つの、話者が言及したいと思う新たな要素が存在することになる（「とある鯨」と「とある船」）。言表において話者が視点を一点に定める（ある一つのことについて語ろうとする）、あるいは何等かの形で話題を階層化する（既に言及したものから新たな要素へ、のような）のが無理のない導入であるとすれば、上の例文のような状況（同時に2つの新しい話題を提示する）が比較的「起こりにくい」であろうことは理解できる<sup>28</sup>。

さまざまな発話の状況設定の過程で新たな要素は導入されるが、とくにいわゆる存在文によって新しい要素の導入が実現される<sup>29</sup>という主張は我々の直感的理解に照らし合わせても容易に納得できる。

ロシア語の存在文について語るとき、われわれは繰り返し論じられてきた問題、すなわち、*есть*型の構文と $\emptyset$ 型の構文の解釈に目を向ける必要がある。お馴染みの例：

335) У него *есть* седые волосы.

336) У него [ $\emptyset$ ] седые волосы.

あるいは

337) В этой библиотеке *есть* интересные книги.

338) В этой библиотеке [ $\emptyset$ ] интересные книги.

によって例示されるように、*есть*型では主として言及対象の存在が主張されているのに対し、ゼロ型では対象の属性に焦点がある。前者に於いては言及対象と同カテゴリーの、異なる属性を持つ要素の存在を排除しないことから、部分の意味（「彼は白髪混じりだ」「この図書館にはおもしろい本がある」）が生じ、後者に於いては属性自体に主点があるので同カテゴリーの他の要素の存在を問題にしないことからそれ自体で完結した絶対量、あるいは全体の意味（「彼は白髪だ」「この図書館の本はおもしろい」）が生じる<sup>30</sup>。

*один*が存在文で用いられるとき、*есть*型の文と $\emptyset$ 型の解釈の違いが先に示した[*один*]におけるОДИНとодинの意味の分裂に対応する。Арутюноваの指摘によれば

339) У нашей кошки *есть* один котенок.

は唯一性を含意しない。このときの[один]は不定名詞句のодинで「ある小猫」の  
についての発話である。数の主張に関して情報を伝えなければ:

340) У нашей кошки [Ø] ОДИН котенок.  
という形式が適切となる<sup>31</sup>。

もちろん全体・部分の対立が形式化されるのは現在時制においてのみで、過  
去形において解消される構文上の差異は語順、強勢などによって補われることにな  
る:

341a) Был у нашей кошки один котенок. (ある)

341b) У нашей кошки был ОДИН котенок. (一匹の)

この解釈の対立は複数のカテゴリーに拡張できる、つまり“Есть у Петра два  
друга”という発話は友人の数について語っているのではないし (cf. У Петра  
два друга. (数についての情報)) “В нашем классе есть умные девочки” =  
“Некоторые из девочек нашего класса умны”<sup>32</sup>。

さきに示したнекоторыеの相対的な複数性あるいは部分の意味もまた、存在  
文の解釈に寄与する

342) В нашем институте в некоторых комнатах есть кондиционеры.<sup>33</sup>

= В нашем институте среди комнат есть такие, в которых есть кон-  
диционеры.

逆に、言及対象がただ一つしか存在しないことが明らかな状況では[один]の  
使用は回避される:

343) Есть у меня одна приятельница, Мария,

а у Марии есть [Ø] муж, очень талантливый скрипач.

(\*а у Марии есть один муж...)

ここでは所有の主体に対し、言及対象が一意的に決まることが言語外の現実  
に参照して明らかで、このような場合には、ゼロ限定辞の使用が義務的となる。

одинによって形成される不定名詞句はまた、語順が示唆する名詞句の定性を  
キャンセルする:

344) Одна женщина рассказала мне интересную историю.

cf. Женщина рассказала мне интересную историю.

不定形容詞がなければこれは普通、「(その)女性が語った」と解釈される<sup>34</sup>。

不定形容詞のодинは対象が指示的かつ未定あるいは未知である場合に、そ  
の標識として用いられる。ところで、対象が現実には指示的であっても、発話の  
要請上同定されることを必要としない場合がある。これは「同定可能identifi-  
able」であっても実質上は同定されず、不特定の要素の資格で扱われる。このよ  
うな場合одинは用いられない。次の346b)のような場合がこれにあてはまる:

345) Вчера я слышал интересную историю.

= Вчера я слышал одну (//некую) интересную историю.



346) Вчера я съела помидор.

346b)? Вчера я съела один помидор.

346b)の場合、[один]の解釈は普通にはまず、ОДИНである。ここで語られているのは過去の事実であり、名詞句は必然的に指示的で、同定可能な指示対象を表す。しかしながらあるトマトが、「特定」のものとして他のトマトから識別されて取り上げられるというのはよほど特別な場合であろう。Николаеваが示した、いま一つの興味深い例は、だれかが物音を聞いて"Кто там?"と訪ねた場合、例えば - Одна девушка.のように答えることができる。これに対し猫がいたときにはただ - Кошка. というのが普通で - Одна кошка.(одинの意味で)とは普通答えない<sup>35</sup> というものである。これらの例から示唆されるように、指示対象は必ず「同定可能 identifiable」であるが、対象およびそれが現れる文脈によっては「同定」されないケースがある。

上記のことと関連して、одинの使用が許容されない状況で重要なのは総称的表現、あるいは不特定の(任意の)対象への言及の場合である。

すでに述べたように、総称的表現はロシア語を始めスラブ諸語でゼロ限定辞+単数名詞によって表現される。このことは、同じ表現が冠詞を持つ言語では多くの場合冠詞(定冠詞+単数名詞、あるいは不定冠詞+単数名詞)を伴って表されることとの対比において注目されてきた<sup>36</sup> :

<総称的・定冠詞⇔ゼロ限定辞>

347)eg. The lion is strong.

rs. Лев - сильное животное.

\*Один лев - сильное животное.

348)eg. The telephone is a useful invention.

s-c. Telefon je koristan izum.

\*Jedan telefon je koristan izum.

<総称的・不定冠詞⇔ゼロ限定辞>

349)eg. She has never been to a theatre.

rs. Она не была в театре.

350)eg. A poet is a man who writes poems.

s-c. Pesnik je čovek koji piše pesme.

\*Jedan pesnik je čovek koji piše pesme.

総称的表現で[один]が用いられる場合、それはОДИНか[один]の他の語義である :

351) С кошками заниматься приходится довольно долго. На один трюк уходит год, на другой - два. [Шаука и Жизнь 122]

352) Одна женщина способна на подвиг.

(= один01)<sup>37</sup>

IV. одинが照応機能を担う場合 ; один06およびодин07について

不定名詞句は聞き手の個人言語の中に新たな要素を導入する。このような表現は当然、照応の意味や形式とは相いれないものである。ところで、言語においては「連想の照応Anaphore of association」ということが指摘されている：

400) Pass me a sandwich.

会食の席である人がこう言えばa sandwichは発話が向けられた相手の手の届く範囲にあるいくつかのサンドウィッチのひとつ(one of...)をさすのであり「ボツワナから輸入してくるようなもの」ではない<sup>39</sup>。また：

401) Seeing all the kittens in the shop, Jane made up her mind to look for a female.

402) Employers are prohibited by law from victimising an employee.

などの例で不定冠詞+名詞で示される要素は全く不特定のあるいは未知の集合から選ばれる要素ではなく、既に言及された要素に関連づけられる、という意味で限定された要素である。このような不定名詞句は連想の照応と呼ばれる<sup>39</sup>

この事象はодинの機能を考える上にも無視できないように思われる。

403) Лекция окончилась.

a) Остался один профессор.

b) Осталась одна девушка.

授業には一人の教授と複数の学生がいる、という前提のもとで、普通に解釈すれば、403a)のодинはまず「ただ...のみ」と解釈できても不定名詞句としては解釈できないだろう。教授の単一性が含意される状況ではゼロ限定辞(Остался [Ø] профессор.)が優先的となるはずである。一方、403b)の場合には「(出席した学生のうちの)ある一人」の意味が明確である。先行文脈にすでに上位集合を示す表現が明示的にあれば所与の表現において照応の意味が明確になる：

404) Сады везде. Один сад рос на мостовой.

(•На мостовой рос один сад).

405) Мы увидели стаю птиц. Вдруг одна птица подлетела к нам.

ここではодна из этих птиц (/из них)と同義である。

厳密な語彙上の一致から少しずれる場合もある：

406) Потом они долго смотрели на свиней. Один боров лениво встал.

(•Один боров из этих свиней)<sup>40</sup>

одинが何かの上位集合を想定した上で用いられることは既に明らかにしたが、その上位集合が明示的に表現されるとодин06(=один из...)になる。

407) Три солнца и крест увидели в одни из предновогодних дней жители Шакаяского района в Литве. Необычное явление продолжалось часа четыре. Одним из свидетелей этого феномена сотрудник Вильнюсского планетария Саулюс Канишаускас вполне научно объясняет это явление.

[МН №1. 1991]

один из の場合(один 06)、それが用いられる環境によって、不定形容詞と数

量詞の中間的な意味を表す。один06 が один とはつきり異なる点は 定名詞句の同位成分や述語として用いられることで、このときには数量詞ОДИНの解釈が優先的にでる：

408) Понимаете, я был марксистом до 17 лет. - В Австрии? -В австрии. У меня был друг, он был русским социалистом, одним из лидеров студенчества в революции 1905 года. [МШ №46. 18.11.1990]

один07(один/одни...другой/другие)では既に言及済みの上位集合のうちの一方(あるもの)を他方と対比して言及するので、より照応の機能が明確になる。

409) Из указательных местоимений одни выражают субстанциальную идентификацию, другие - идентификацию качественных характеристик.

[Шадучева, 133]

один07の照応の機能は選択肢が2つしかないとき、最も明確になる：

410) Тогда прокуратор распорядился, чтобы легат выделил из римской когорты две кентурии. Одна из них...должна будет конвоировать преступников...Другая же должна быть сейчас же отправлена на Лысую Гору и начинать оцепление немедленно. [Булгаков, 419]

одинそれ自体の言表行為に占める役割はそれほど重要なものではないかも知れない。しかしこれを言語学上の様々な問題とからめて検討すると、つきるところがない。また、この稿では扱わなかったいくつかの重要な問題が残されている。まず、否定との関係(否定辞の作用域との関係など)。そしてその他の不定形容詞の機能の違い。これらについてはまた、考察を進めなければならない。

[本文中の略記号:s-cとあるのはセルビアクロアチア語]

[注]

1. Charles Bally, *Linguistique générale et linguistique française*, Francke, Berne. 1944. p77.
2. Gottlob Frege, *Über Sinn und Bedeutung*, (First Published in: *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, 1892 vol.100, pp25-25.) *Kleine Schriften*. Herausgegeben von Ignacio Angelelli. Wissenschaftlich Buchgesellschaft, Darmstadt, 1967; Translation: Geach & Black eds. *Philosophical Writings of Gottlob Frege*, 3ed. Blackwell 1980, pp56-78; (邦訳 土屋俊 訳「意義と意味について」勁草書房 現代哲学基本論文集1, pp1-44); Bertrand Russel, *On denoting*. *Mind*, 1905 No14 479-493;

R.C.Marsh ed. Bertrand Russel, *Logic and Knowledge*, George Allen & Unwin 1956, pp41-56. (邦訳 清水義夫 「指示について」 勁草書房 現代哲学基本論文集1, pp45-78.

3. Keith Donnellan. *Reference and Definite Descriptions*, *Philosophical Review*, 1966, No75, pp281-304. この論文は確定記述を巡るラッセルの議論、及びこれを批判したストローソンの議論の双方に対する批判として提示されたが、名詞句と指示対象の関係の多義性は確定記述の枠を越えて論じられることになる。その一つが次の注4のParteeの論文である。

4. Partee. B., *Opacity, coreference, and pronouns*, D. Davidson and Gilbert Harman ed. *Semantics of Natural Language*, Reidel Pub. Dordrecht, 1972, 415-441; p417.

5. 「同定」について補足すると次のようになる：ある人において、同種の他のものと区別する何か一つ以上の属性を帰属させることができる対象が知られている時、つまり指示対象と、それに固有の属性が結びついている時、対象は「同定されている」と判断され、その属性によって人は対象について語る、つまり対象を表示することができる。するとそれらの属性が話者にとっては対象を同定する属性であり、そのようにして同定された対象はその属性の総体としてとらえられる。そのとき、対象を見て、「これがそのものだ」と指定できるかどうかは本質的でない（実際にはそうして指定できる状態になったときに「同定」と判断される場合が多い。これはまさにラッセルの直認acquaintanceの意味である）。

この考え方は多分に循環論法的で、かなり不確かなものである。「同定」の基準、つまりなにをもって、あるいはどれだけの属性が明らかになれば「同定」されたと言えるのかについて何も述べてはいないし、指示対象と、それを同定する属性・特徴の関係について、要するに、「同定」するのに必要な属性の束を持って同定する、ということ以上のことを述べていないのだから。

さしあたり、この問題に答える純粋に言語学的な（文法的な）解決は保留しなければならない。属性の集合として個体を捉える考え方（フレーゲやラッセルの「あえて同一項でくくるとして」）、「固有名は省略された記述である」とする見解や、指示対象はそれが持つ一連の属性によって固定されるという「群概念 cluster concept」の考え）はクリプキによって批判されている。クリプキの議論および彼が批判した「群概念」（こちらの考えはたとえばサールにおいて擁護されている：J. Searle. *Proper Names*, *Mind*. 1958 Vol.67, 166-173 : サールの固有名詞と指示対象、記述についての考えはSearle J.R., *Speech Acts, an Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge Univ. Press 1969, ch.7.

*Proper Names* においても述べられている：「アリストテレスが通常彼に帰せられている性質の論理和（非排反的選言 non-exclusive disjunction）を持っていることは必然的な真理である」邦訳「発話行為」p305: ところで固有名詞が「意味」を持つかどうか、という問題は指示の問題と密接に関わる、しかし別の大きな問題である」とともに興味深い問題であるが、ここで詳細には立ち入らない。これらに関しては：Saul Kripke, *Naming and Necessity*, Cambridge, Harvard

Univ. Press 1980;邦訳 八木沢、野家訳「名指しと必然性」産業図書、1985。

J. Searle. Proper Names, Mind. 1958 Vol.67, 166-173; J.R. Searle, Speech

Acts, An Essay in the Philosophy of Language, Cambridge Univ. press 1969;

邦訳 坂本百大、土屋俊訳「言語行為」勁草書房 1986。

当面の「同定」に関する説明の困難さを考えるにあたって、どのような属性、特徴が対象を同定するのかが、語られる対象の性質や同定の判断される局面（何が問題なのか、何によって他と区別するのか）によって異なることを、認めなければならない。

ロバチェフスキー-Лобачевскийという表現（「固有名」）の指示対象は現代人にとっては「ノヴゴロド生まれの19世紀の数学者」、「非ユークリッド幾何学の創設者」「ある直線に対する平行線は無数に存在することを果敢にも主張した数学者」などの属性の束として同定される（ここでは明かにラッセルのいう直認acquaintanceは問題にならない。彼に会うことも、声を聞くこともないのだし、せいぜい、肖像画を見ることによって「顔を知ることができる程度だから）。けれども彼の晩年の同時代人にとっては同じ人物が、「カザン大学を追われた、盲目の、気違い学者」という属性によって同定されただろう。場合によっては「ロバチェフスキーは非ユークリッド幾何学の先駆者だ」と言っても少しもその人物が「同定」されたことにはなるまい、この属性が理解されるための（より正確には、この言明がある人物を同定するのに有効な属性であることが理解されるための）若干の数学的、および歴史的知識がなければ。このことは、対象が同定されるためには背景となる（広い意味での）文脈が必要である、ということの意味している。

上記から察せられるように何を以て「同定」あるいは「未定」とするかは、言表行為に関わる主体の判断に関わる。実際、「スターリン」といえば最も普通の場合、われわれは直ちにその指示対象を「同定」することができる。そのとき、スターリンが実際に持っていた属性、彼の生涯における言動や彼の個人的な部分の全てを問題とするわけではない。

同定は他のものから識別することであるから、言及される対象事柄の複雑さ（あるいは単純さ）に応じて、比較的単純な（単一の）情報によって同定される場合と、様々な情報を必要とする場合がある。「昨日捕まえた魚」と「昨日捕まえた泥棒」という表現を比較してみればこのことは明かであろう。ここにかかわるのは言表において同定することと、物理的に「同定可能identifiable」であることが常に一致しないという事実である。

一層困難なのは、対象が「同定」された状態を、未定の状態から峻別することで、この2つの段階は本来連続的なものである（この違いはいわば「漠然と知っている」あるいは「少し知っている」状態と「はっきり知っている」状態の違いに等しい。これはたぶん、本来連続的な世界を離散的な記号である言語に反映させるといふ言語活動の宿命なのだろう）

6. 従って勿論、ここでいう定名詞句は確定記述definite descriptionとも異なる。

7. Weiss, Daniel. Indefinite, definite und generische Referenz in artikellosen slavischen Sprachen, Slavistische Linguistik, 1982, Referate des VIII Konstazer Slavistischen Arbeitstreffens. Kiel (28.09-01.10) 1982. Herausgegeben von Hans Robert Mehlig, Bd. 172, Otto Sagner, München, 1983. pp229-261 ; p231-.
8. В.Г. Гак, Сравнительная типология французского и русского языков. М. Просвещение, 2-е изд. 1983. стр.115.
9. U. Ungel & P. Mrazović, Kontrastive Grammatik deutsch-serbocroatisch, Novi Sad 1986, t.2, str.1386.
10. Гак, op. cit. 115.
11. Словарь Русского языка в четырех томах. АН СССР. 2-е изд. Русский язык. 本論では一様にAK4<sup>2</sup>と記す。
12. この節の議論を思い付かせたのは冒頭で引用したバイイの指摘と、デュクロの論文「不定表現と言説」に引用されているバイイの同じ箇所のロシア語訳である。ちなみにその訳は次のようになる：Грамматическое понятие *неопределенный* двусмысленно: когда говорят о нескольких собаках, то число собак бывает или неизвестно, или не выражено, но оно не неопределенно. Дюкро, О., Неопределенные выражения и высказывания, Новое в Зарубежной Лингвистике. 13. стр. 270 ; Ducrot, O., Les indéfinis et l'énonciation. Langage, 17, 1970, p91-107.
13. このように聞き手にとってのみ「不定」の場合を、Падучеваは「弱く不定的 слабонеопределенный」としている：Падучева, Е.В., Высказывание и его соотношенность с действительностью. АК СССР М. Наука 1985. стр.210-.
14. 基本単位や数そのものの意味を問うことはすまい。それはまたフレーゲからクリプキに至る一連の議論やウイトゲンシュタインを悩ませた「1メートルの単位となる棒の長さ」の問題に取り込まれることになるであろうから(「1メートルであるともないとも言えないものが一つある。それはパリにあるメートル原器であるだがこれはメートル尺による測定という言語ゲームにおいてそれが果たす特異な役割を明示したに過ぎない」:Anscombe & Rhees eds. Wittgenstein. Philosophical Investigations, 1953, § 50 ; 邦訳 大修館 ウイトゲンシュタイン全集 8, p57)
15. Ducrot, op.cit.
16. Ожегов Словарь русского языка. 9-е изд.
17. Богуславский И.М., Исследования по синтаксической семантике, М. Наука, 1985. стр.105; 同じように英語のonlyについてもeveryやsomeなどとは異なる作用域を持つことが指摘されている： Only John works.; Only the president was invited.: Thijsse, "On some proposed Universals of Natural language", Meulen, A., ed. Studies in Modeltheoretic Semantics, Foris, Dordrecht 1983, cit : 白井健一郎 形式意味論入門 産業図書1985, 242.
18. Русская Грамматика, Praha 1979, p507; Русская Грамматика АН СССР.

1980. 1151; 1305; 1366; Краткая русская грамматика М. Русский язык. 1989. стр.220.
19. Русская Грамматика, Praha 1979, p507.
20. Мельчук И., Лично-количественные ("собирательные") числительные в русском языке. Russian Linguistics 1982, No6. pp307-334; p315.
21. Мельчук И. op.cit.
22. "superset"の考えはたとえば:Platteau, Frank, Definite and indefinite generics, in Auwera, 112-123, p115-.
23. ここで言及した一連の、plusieurs, quelques, certain(e)sに関する考察および例は主として: Francis Corblin, Indéfini, défini et démonstratif; constructions linguistiques de la référence. Librairie Droz, Genève-Paris 1987. pp54-78による。フランス語のplusieurs, quelques, certain(e)sについてはまた: Grevisse, Le bon usage. Grammaire française avec des Remarques sur la langue française d'aujourd'hui. 11ed. Duculot 1980. § 974 (plusieurs); 962 (quelque); 955 (certains); リーチ、ロベルジュ 現代フランス語法辞典大修館 1975.を参照した。
24. この分類は伝統的な分類に従う: Русская Грамматика. АН СССР.1980. 1305; 1379.
25. Практическая грамматика русского языка. М. Русский язык. 1985. стр. 41-42.
26. Падучева, Е.В., Высказывание и его соотносительность с действительностью. стр.214.
27. Падучева, op.cit. стр.213.
28. Николаева, Т.М., Функциональная нагрузка неопределенных местоимений в русском языке и типология ситуаций, Известия АН СССР, Серия Лит. и языка. 1983, Т.42. №4 стр.342-353; 347.
29. Арутюнова Н.Д., Ширяев Е.И., Русское предложение. Бытийный тип. М. Русский язык, 1983. стр.
30. Хем чандра Панде. Глагол быть и количественная характеристика объекта. Russian Linguistics, 1985, No9, pp17-25. Пандеでは*есть*型と*Ø*タイプを部分*партитивность*と全体性*целостность*の対立として捉えている。ただし、*есть*タイプでも限定辞に強勢がおかれると全体の意味が導かれる: В нашей группе *Ø/есть* НОВЫЕ студенты. Панде, op.cit. p23.
31. Арутюнова Н.Д., Ширяев Е.И., op.cit. p56.
32. Арутюнова Н.Д., Ширяев Е.И., op.cit. p74.
33. Арутюнова Н.Д., Ширяев Е.И., op.cit. 20.
34. Николаева, op.cit. 343.
35. *ibid.*
36. 以下の例は: Victor Raskin. Determination with and without articles, in Auwera, pp124-134; ex.126; Шлеbec, Boris, Articles in Serbo-Croatian

and English, *Folia Slavica*, 1986, vol.8, No1. pp29-50. p41; Ivić, M., *Leksema jedan i problem neodredenog člana*, *Zbornik za filologiju i lingvistika*. 1971, 14. 103-120 (cit. Hebec, op.cit.)

37. Николаева, Т.М., Словосочетания с лексемой "один". Форма, значения и их контекстная маркированность. в: Золотова (ред.) *Синтаксис текста*. М. 1979. стр.134-152; стр.136: "только класс женщины обладает этим свойством : другой класс (мужчины) этим свойством не обладает: cit. Weiss, p240. ヲァイスはまた、одинが他の形容詞なしでは連辞文の述語を構成しないことも指摘している (один такой)のような結合では可能: "Свинухка - это один гриб такой") : Weiss Daniel, *Indefinite, definite und generische Referenz in artikellosen slavischen Sprachen*, p240. この点は本論IVでも言及した。
38. Frank Platteau, *Definite and indefinite generics*, in Auwera, pp112-123; pp115-116.
39. Werth, Paul, *Articles of association: Determiners and context*, in Auwera, pp250-289; p261.
40. Weiss. op.cit. p238.

[参考文献ならびに用例出典]

Арутюнова Н.Д., Ширяев Е.И., *Русское предложение. Бытийный тип*. М. Русский язык, 1983.

Богуславский И.М., *Исследования по синтаксической семантике*, М. Наука, 1985.

Гак, В.Г., *Сравнительная типология французского и русского языков*. М. Просвещение, 2-е изд. 1983.

Дюкро, О., Неопределенные выражения и высказывания, *Новое в Зарубежной Лингвистике*. 13. ;Ducrot, O., "Les indéfinis et l'énonciation" *Language* 17, 1970, pp91-107.

*Краткая русская грамматика* М. Русский язык. 1989.

Мельчук, И., "Лично-количественные ("собирательные") числительные в русском языке" *Russian Linguistics*, 1982, No6. pp307-334.

Николаева, Т.М., "Функциональная нагрузка неопределенных местоимений в русском языке и типология ситуаций" *Известия АН СССР, Серия Лит. и языка*. 1983, Т.42. №4 стр.342-353.

Николаева, Т.М., "Словосочетания с лексемой "один". Форма, значения и их контекстная маркированность" в: Золотова (ред.) *Синтаксис текста*. М. 1979. стр.134-152.

Ожегов, С.И., *Словарь русского языка*. 9-е изд.

Падучева, Е.В., *Высказывание и его соотношенность с действительностью*. АК СССР. М. Наука, 1985.

Панде, Хем Чандра, "Глагол быть и количественная характеристика объекта"



- Russian Linguistics*, 1985, No9, pp17-25.
- Практическая грамматика русского языка*. М.Русский язык 1985.
- Русская Грамматика*, Praha 1979.
- Русская Грамматика*, АН СССР. 1980.
- Словарь Русского языка в четырех томах*. 2-е изд. АН СССР.
- Auwera, J. van der, *The Semantics of Determiners*. Croom Helm London Univ. park press. Baltimore, 1980.
- Bally, Charles, *Linguistique générale et linguistique française*, Francke Berne 1944.
- Corblin, Francis, *Indéfini, défini et démonstratif; constructions linguistiques de la référence*. Librairie Droz, Genève-Paris 1987.
- Donnellan, Keith, "Reference and Definite Descriptions" *Philosophical Review*, 1966, No75, pp281-304.
- Frege, Gottlob, "Über Sinn und Bedeutung." (First Published in: *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, 1892 vol.100, pp25-25.) *Kleine Schriften*. Herausgegeben von Ignacio Angelelli. Wissenschaftlich Buchgesellschaft, Darmstadt, 1967; Geach & Black eds. *Philosophical Writings of Gottlob Frege*, 3ed. Blackwell 1980, pp56-78; 邦訳 土屋俊 訳「意義と意味について」勁草書房 現代哲学基本論文集1, pp1-44.
- Grevisse, *Le bon usage*. Grammaire française avec des Remarques sur la langue française d'aujourd'hui. 11ed. Duculot, 1980.
- Hlebec, Boris, "Articles in Serbo-Croatian and English" *Folia Slavica*, 1986, vol.8, No1. pp29-50.
- Ivić, Milka, "Leksema jedan i problem neodredenog člana" *Zbornik za filologiju i lingvistika* 1971, 14. str.103-120 (cit. Hlebec).
- Kripke, Saul, *Naming and Necessity*, Cambridge, Harvard Univ. Press 1980; 邦訳 八木沢、野家訳「名指しと必然性」産業図書 1985.
- Partee, Barbara, *Opacity, coreference, and pronouns*, D. Davidson and G. Harman ed. *Semantics of Natural Language*, Reidel Pub. Dordrecht, 1972, pp415-441.
- Platteau, Frank, *Definite and indefinite generics*, in Auwera, pp112-123.
- Raskin, Victor, *Determination with and without articles*, in Auwera, pp124-134.
- Russel, Bertrand, "On denoting" *Mind*. 1905. No14, pp479-493; R.C.Marsh ed. Bertrand Russel, *Logic and Knowledge*, George Allen & Unwin 1956, pp41-56.; 邦訳 清水義夫 「指示について」 勁草書房現代哲学基本論文集1, pp45-78.
- Searle, John, "Proper Names" *Mind*. 1958. Vol.67, pp166-173.
- Searle, J.R. *Speech Acts, an Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge Univ. press 1969; 邦訳 坂本百大、土屋俊訳「言語行為」勁草書房

1986.

Thijssse, "On some proposed Universals of Natural language", Meulen, A., ed. *Studies in Modeltheoretic Semantics*, Foris, Dordrecht 1983, cit: 白井健一郎、形式意味論入門 産業図書 1985.

Ungel U., P. Mrazović, P., *Kontrastive Grammatik deutsch-serbocroatisch*, Novi Sad, 1986, t.2.

Weiss, Daniel. *Indefinite, definite und generische Referenz in artikellosen slavischen Sprachen*, Slavistische Linguistik, 1982, Referate des VIII Konstazer Slavistischen Arbeitstreffens. Kiel (28.09-01.10) 1982. Herausgegeben von Hans Robert Mehlig, Bd. 172, Otto Sagner, München, 1983. pp229-261.

Werth, Paul, *Articles of association: Determiners and context*, in Auwera, pp250-289.

Anscombe & Rhee eds. Wittgenstein. *Philosophical Investigations*, 1953, リーチ、ロベルジュ 現代フランス語法辞典 大修館, 1975.

Булгаков М., *Мастер и Маргарита*. М. Художественная литература 1973.

Достоевский Ф.М., *Преступление и Наказание*. М. Художественная литература 1978.

Рыбаков А.И., *Дети Арбата*, М. Книжная палата, 1988.

*Наука и Жизнь* 1990 №10.

МН(Московские Новости)